

# エッセイスト・プリーストリー

白 井 毅

プリーストリー John Boynton Priestley (1894—) は作家としてきわめて多才だといえるであろう。小説は1929年の出世作 *The Good Companions* をはじめ *Angel Pavement* (1930), *They Walk in the City* (1936) 等の長篇内至中篇物十数に及び、劇作は悲劇、喜劇、笑劇、放送劇と多岐多彩、評論としては *The English Comic Characters* (1925), *The English Novel* (1927) 等がある。エッセイにいたっては1922年の *Papers from Lilliput* にはじまり今日にいたるまで縦横に書きまくっている。更に、これは遠く隔っていて直接の触れ合いがないため実感が伴わないけれども、本国において彼はすぐれた広い意味でのジャーナリストで、ラジオ、テレビ方面で相当に名を売っているらしい。

一体、現在盛んに活躍している作家に適確な価値判断を下すのは容易なことではない。自ら、その作家の業績を広くくまなく渉獵してから、これを行うほかないからである。参考となる資料、文献のたぐいがあればまことにありがたいが、プリーストリーの場合にはこれは望むべくもない。1948年版の Richard Church 著 *British Authors: A Twentieth Century Gallery* (Longmans) にはプリーストリーが紹介されているのに、その頃までに *Down and Out in Paris and London* (1933), *Burmese Days* (1934), *Animal Farm* (1945) 等の parody, autobiography, essay によって、立派に作家として存在を認められていてしかるべき George Orwell (1903—50) は載っていないが、プリーストリーより九才も若年のその Orwell には John Atkins による研究書<sup>(1)</sup> が死後四年にしてすでに刊行され、作家、作品の理解、鑑賞に役立っているにもかかわらず、プリーストリーにはそういったものが見当たらないのである。

したがって以下は、残念ながらきわめて間口も興行もないプリーストリー観にもとづいて書かれたものであることをおことわりしておかねばならないのであるが、プリーストリーは何より先にエッセイストである——こう断じておいて、順を追ってその裏づけをしてゆくことにしたいと思う。彼はいい意味で通俗的で、いわゆる大家の部類には入り得ず、小説家あるいは劇作家としても、今までの活動状態や傾向から推して到底イギリス文学史上の里程標的存在とはなり得ないで

(1) John Atkins, *George Orwell* (1954).

あろう。これは、お互に非常に異質ではあるが、作品の量や作家としての規模という点でよく似通った Maugham (William Somerset, 1874—) の場合にも、同じことがいえそうである。しかしこの二人は、共に当然現代の作家の中では問題にしてよい存在であろう。ただし、Maugham は小説家、プリーストリーはエッセイストとしてである。

そもそもプリーストリーの文筆活動はエッセイをもってはじまっているのである。即ち彼は第一次大戦後、Cambridge の学生の頃、*Papers from Lilliput* と題するエッセイ集を1922年に出した。引続いて1930年まで、評論、小説の間を縫ってエッセイを書き続けている。1920年代の彼の作品リストに照し合わせてそれを調べてみよう。

<i>Papers from Lilliput</i>	エッセイ	1922年
<i>Brief Diversions</i>	戯文	1922年
<i>I for One</i>	エッセイ	1923年
<i>The English Comic Characters</i>	評論	1925年
<i>George Meredith</i>	評論	1926年
<i>The English Novel</i>	評論	1927年
<i>Open House</i>	エッセイ	1927年
<i>Apes and Angels</i>	エッセイ	1928年
<i>The English Humour</i>	評論	1929年
<i>The Balconinny</i>	エッセイ	1929年
<i>The Good Companions</i>	小説	1929年

1930年、*The Good Companions* に続く傑作 *Angel Pavement* が出た後、にわかに戯曲の数がふえ、エッセイが影をひそめているが、1937年に自ら編んだ *Self-Selected Essays* (Heinemann) の序文に、「この選集の中の半数以上は最近土曜評論及び週末評論に掲載したなかから集めたもので、どの単行本にも出ていない。残余は *Papers from Lilliput*, *I for One*, *Open House* 及び *Apes and Angels* から各出版者の好意により選ばせて貰った」<sup>(1)</sup>とあるように、こういう部類のエッセイは新聞等のきめられた紙面を埋める性質のものなのであるから、一冊にまとめなくても、その間エッセイ活動は杜絶えていなかったにちがいない。更に、「ここに収録したエッセイは極く初期のものともつとも後のものとは十一年の年代の差がある。これは決して長い期間とはいえないかもしれないが、自分が文筆を業とするようになってから今日までより一年もしくは二年長いことになる」<sup>(2)</sup>と述べ、「およそこの間、常に自分の好んで書いたのは短いエッセイである。現在しばらくそれには御無沙汰している——もっともいつかは関心

(1), (2) J. B. Priestley : *Self-Selected Essays* (1937), p. vii.

と希望を新たにしてそれにふたたびもどりたいと考えている」<sup>(1)</sup>と、このようにエッセイへの抱負を披瀝している。

さてそれから十二年、1949年にプリーストリーは技巧的にも、構想の点からも従来のものをはるかに凌駕する *Delight* を、次いで1957年には一面プリーストリーらしからぬはげしい気迫のこもった *Thoughts in the Wilderness* を世に問うた。これらは1937年の選集の序文中の声明を具現したものと見なし得るし、又同時にエッセイストたるの所以を自ら示したものといてよい。

エッセイを「随筆」といってしまったのではいささかの感じは去らないから、ここではわざとエッセイのままにしておく。イギリス文学においてはエッセイは十分文学のジャンルの一つとして成立しているし、寡聞にしてほかの国の場合を必ずしも詳にしていなくても、エッセイの温床としてイギリスほどのところは他にはなさそうである。これはエッセイの本質とイギリスの国民性とが見事に調和するからであろう。あるいは好みが強すぎるいい方かもしれないがイギリスはエッセイの国であると思う。そういうイギリスのエッセイを考察するには、二つのやり方でこれをしなければならぬ。昔から今までを縦に見とおすことと、漠然とでなくエッセイの本当の性格を見きわめること、この両方が併せ進められるべきである。ところがこれは徹底させようとするれば、それだけで大きなテーマとなり、到底ここでは扱いきれないことになるから、いまはプリーストリーのエッセイを扱う参考に必要な程度にしておいて、論旨をはこんで行くことにしたい。イギリスのエッセイ史上で彼は、どんな地位を占めていて、彼のエッセイの真価はどれ程のものなのだろうか。

エッセイはいろいろに解釈ができる。イギリスにはじめてエッセイを植えつけたのは Francis Bacon (1561—1626) だとか、エッセイのお手本は Charles Lamb (1775—1834) であるというようない方はあまりにも「随筆」的であって、漫然すぎるけれども、エッセイと、いわゆる「随筆」とがごっちゃになって、エッセイは誰にでも書けるものと思ひ、高をくくって、真剣な、突込んだ見方や考え方をしない場合が案外世間には多いのではないかと思う。エッセイとは個人の見聞、経験をその人自身の考えを基にして記録したもの——まづ、大ざっぱにこう規定しておいて、さて落ついて考えると、これだけでは隙間だらけ、穴だらけのような気がすると思う。「随想を書きしるしたもの」、「随意に思い出るままを書きつらねたもの」——このように、いかようにもいえて、しかもどこか意を尽し得ていない感じ、これがあるいはエッセイの持つ特性かもしれない。エッセイは誰にでも書けるというものではない。エッセイが完全なものとなるに

(1) J. B. Priestley : *Self-Selected Essays*, p. vii.

は、先づその作者個人に物を見、物を考える能力がしっかりとそなわっているということ、これが実に大切な事で、これを欠いてはエッセイは芽生えて来ない。次に自分の眼で見、頭で考えたことをまとまったかたちに整えて表現する才能が要る。そして常に、自分は第三者的立場に立って事柄をおだやかに、偏しないで、しかもゆとりのある態度で眺めていることが必須の条件である。この三つを兼ねそなえることが、すぐれたエッセイストの資格になる。そうやってでき上ったものには、その人その人の人柄や味わいがにじみ出て来るだろうが、自分の哲学を絶対唯一の尺度にして割切った結論を下そうとしたり、激情、昂奮に駆られて冷静な観察が邪げられるようなことでは困るのである。上の条件は先天的に各人に具わっているものとは限らないけれども、誰にでも得られるものではなく、いわんや無為のままでは獲得できはしない。かく考えて来ると、学究とまではいわずとも、相当高度の見識をそなえていないとエッセイは書けない——はっきりいうと、そういうことになって来ると思う。又一方読む側でも、「随意に書かれたものを随意に読む」わけであるが、一応の内容の把握と理解なしではエッセイの鑑賞は不可能であろう。読む人によって解釈が異り、受取り方がさまざまでも、書いた人の意図や気持の動きを汲み取り、同じ立場に身をおいて考えて見るなど、いろいろの責務を負わされる。年嵩の人でなくては読めないというのは、比較的若い人達よりは人生経験をかきねているから分別があり、判断を誤まらないだろう位のこと、若い人達にしても、それを想像力で補えば正しく、面白く読めない筈はないものなのだから、性急な結論は避けた方がよい。

小説でも、戯曲でも、詩でも、評論でもなくて、しかもある文学的雰囲気を持たせさせた散文が、これ即ちエッセイであるという風に考える余地もあるであろう。思いあぐんで、以上のようにいいあらわして見ると、たまたま福原麟太郎著「英文学小論」（吾妻書房刊）の中で先生が同じようなことをいっておられるのに出会った。文学史家 A. C. Ward は *Foundations of English Prose* (1931) の第五章 *Essays and Letters* の中で、エッセイを、平易に面白く解いて、エッセイを二つに区分して、次のように述べている。

Authors who write delightful essays, have, more often than not, no 'given' subject. They may frequently sit down before a blank sheet of paper to write an essay on... *anything*. That is the ideal condition for a particular type of essay-writer—who may have to produce a monthly, weekly, or even a daily essay for a magazine or newspaper on whatever topics occur to him; or who may write essays because he finds delight in writing—that is, in 'expressing himself' or in trying to communicate to others his own thoughts and sensations. The little that has so far been said on this matter

will already have made it clear that there is more than one kind of essay.<sup>(1)</sup>

この文章自体が見事なエッセイとしての風格を持っているように思うが、更に続けて

Students and scholars are rarely able to sit down to write an essay on anything they choose. A subject is given; the essay must be kept strictly to the subject; it must either display or convey knowledge to others; and that knowledge must be presented in an orderly and logical manner.<sup>(2)</sup>

と説き、エッセイの役目を知識伝達よりは人に楽しみを与えるという点におき、たまたまそれを読んで知慧が増すようなときも、それはあくまでも副次的であるとする。しかしこれには異論も出るであろう。たとえば知識 (knowledge) と楽しみ (pleasure) とは別箇のものとは限らず、むしろ “Knowledge is pleasure.” ということがきわめて自然にいえるような場合だってないこともないからである。とはいえ、イギリス人には一般にエッセイは「読んで面白く、肩の凝らないもの」でなくてはならぬらしい。プリーストリーのエッセイを1956年に *All About Ourselves and Other Essays* という一冊に編集した Eric Gillett によれば、エッセイは “the most readable and friendly of literary forms”<sup>(3)</sup> で、どんな文章よりも読者と作者を親しくするようなもの、又前に名をあげた A. C. Ward は “Few words in English language are less popular than essay.”<sup>(4)</sup> という。これらのことばから、いかなるエッセイがどのようにイギリスでは国民に受けているかが、ほぼわかって来るのではなからうか。

このように見て来ると、プリーストリーもその仲間に加えられる A. A. Milne (1882—), A. G. Gardiner (1865—), Robert Lynd (1879—1954), G. K. Chesterton (1874—1936), Hillaire Belloc (1870—1954), E. V. Lucas (1868—1938) とならぶ線がイギリスのエッセイの系譜となり、それを尚も、年代を逆にたどれば Thomas De Quincy (1785—1859), Leigh Hunt (1784—1859), William Hazlitt (1778—1830) とさかのぼって行き、Charles Lamb の *The Essays of Elia* (1823) が大きくなつなぎ目になる。A. C. Ward のわけ方にしたがえば、上の人達は彼のいわゆる「くだけた」(familiar) エッセイを書くエッセイスト、一方 Macaulay (Thomas Babington, 1800—59), Carlyle (Thomas, 1795—1881), Bacon のものは「固い」(formal) エッセイである。イギリスで

(1), (2) A. C. Ward, *Foundations of English Prose* (1931), pp. 135—6.

(3) *All About Ourselves and Other Essays* by J. B. Priestley. Chosen and Introduced by Eric Gillett (1956), p. ix.

(4) A. C. Ward, *Foundations of English Prose* (1931), p. 135.

は Bacon がエッセイの形式をはじめて文学の中に植えつけたといわれ、又そのことは事実でなくもないが、「くだけたエッセイ」の始祖は Bacon ではなくて、むしろ海を渡ったフランスの Montaigne (Michel Eyquem de, 1533—92) であるとする考えがイギリスの場合は至当であろう。又、Joseph Addison (1672—1719) と Richard Steele (1672—1729) が “The Tattler” 及び “The Spectator” のような定期刊行物によってエッセイとジャーナリズムとを結びつけたことは、その後のエッセイの在り方、榮え方から見て、まさに刮目すべき功績であったと見なすことができる。この両者のつながりは現在でもイギリスのエッセイの著しい特徴になっており、ほとんどすべての名だたるエッセイストは columnist である。

かなり長い前置きの後、いよいよブリストリーのエッセイストとしての足取りを次の五段階にわけて眺めて見ることにする。

- (i) *Papers from Lilliput, I for One* 等のエッセイ集をひっさげて、エッセイストとしてデビューした1920年代初期。
- (ii) *Open House, Apes and Angels* 等によって、ようやく本格的なエッセイストに成長する1920年代後期。
- (iii) 人間的に向上し、めっきり気持の上にゆとりがうかがわれ、それらが作品に反映し、円熟味を増して来た時期。 *Self-Selected Essays* (1937) の編まれたのも、自己反省と自己批判が結実したものと解釈できる。
- (iv) ... some day I shall return to it (i. e. the short eessay 筆者註) with renewed interest and hope.”<sup>(1)</sup> という1937年の声明が具体化したと見られる時期。 *Delight* というすぐれたエッセイ集が世に問われた。
- (v) 現在。最近の社会現象を手きびしく批判したエッセイのかずかずを載せた *Thoughts in the Wilderness* が昨1957年に出ている。

*Papers from Lilliput* 中の *Three Men* は思い出の三人の人物を描いたもの。エッセイとしてより短篇小説のように読める。すぐれた描写が随処に見られるが、独創がなく、文章としては立派でも、気取りが鼻につく。 *On Not Meeting Authors. The Editor* などでは、得意然と人物を描くか、くどくて冗漫。流麗な文章を書く自信が過ぎたのであろう。向う気の強い文学青年の面影を彷彿させる。こういうエッセイであれば、ブリストリーでなくても文を巧みにする人なら誰でも書けそうだという感じのものが多い。 *I for One* になって来ると、物を見る眼がそなわって来ており、足もとももしっかりした様子が見える。一寸はにかんだり、天の邪鬼を装うが、かなり率直、大胆な言辞を弄する。ある貴婦人に

(1) J. B. Priestley, *Self-Selected Essays* (1937), p. vii.

“Now tell me all about yourself.”<sup>(1)</sup> ときかれて、へどもどする。かねてそういうときにはかまうことはないから、抜け抜けと嘘八百をならべて、読みもしない本のこと、行ったこともない名所のことでも喋りまくり、相手を煙にまいてやろうと思っていたのに、いざとなると “My expansive mood suddenly shrivelled to nothing; every richly-dyed shred of personality was stripped from me and there remained only my naked, shivering mortality. Nothing but a jumble of memorable old phrases haunted my mind... What was there to be said?”<sup>(2)</sup> という始末である。けれどもこれは少しおおげさにとぼけて見せているだけで、却って自らがまるで他人のように傍に立って克明に物事の裏表を描いて見せている。これは彼が作文の手練手管を覚えたと解するよりは、過渡的な現象と見るべきであろうか。御託をならべながら舞台の袖にかくれていたのが中央正面で明るい石灰光を浴びるようになったのだと受けとらう。

1920年代も後期になると、盛んに評論の筆をとっている。直接エッセイの修業はしないでも、これは彼の将来には何にもまさる試練の時期だったにちがいない。その結果が *Open House* となってあらわれる。ここにおいて彼のエッセイストとしての地位はほぼ安定する。この集の表題となっている *Open House* という一篇では、食事のとき不図隣りあった人がジョージ叔父にそっくりなことから、叔父さんその人の追憶に耽り、昔、叔父さんが門を開いて訪う客人をあまねくよろこび迎え、家がいつでもにぎやかであったことを懐しむという、心の温まる話が語られる。すでに一家をなした人の筆といってもよく、用語の新しさをさておけば、*Lamb* を偲ばせさえる。明らかに伸びている。

それから1937年までの間、彼は小説、いやむしろ劇作に没頭して、エッセイは公にされない。しかしそういう間も多くの人間像を見たり浮世のたたずまいを眺めて知識をひろめ、腕をみがいたことであろう。これがエッセイ習作に無駄だったはずがなく、*Self-Selected Essays* は今日でもまだ読んでみずみずしい感じのするエッセイ集である。内容の取扱いが適切、種類も豊富で、紀行 (*Home from the Sea, Inn of the Six Anglers, Oberammergau, Lilac in the Rain*)、趣味娯楽 (*Davis Cup, An Apology for Bad Pianists, Seven Gods*)、感懐 (*In the British Museum, Among the Glass Jars*)、意見 (*Too Many People, Man Underground*) と、目まぐるしい程、多種多様である。わが眼で眺め、わが頭で考え、おだやかに観照し、それを巧みに表現する——エッセイストの資質をほとんど完全に発揮するまでに立派な成長を遂げている。誰の身边にも同じようなことがおこっており、誰の考えることも似たようなものだ——洋の東西を問わず、人情はかわらないと思わせる。

(1), (2) *All About Ourselves and Other Essays* by J. B. Priestley (1956), p. 229.

1949年の *Delight* には「書く人もそうだろうが、読む方もまことに楽しい」というような万人の心をなごませるエッセイが満ち溢れている。ほとんどが思い切り短く、数にして百十四にもなる。「幼い頃の思い出のたのしみ」「年令にかかわりのない老幼に共通のたのしみ」「天衣無縫のたのしみ」「ほろにがいたのしみ」「渋味のあるたのしみ」「しこりは残るが真底はたのしいというもの」「人と交ることのたのしみ」「美しいものに触れるたのしみ」「旅のたのしみ」といったような人間のいろいろの感情を、銜いも、気取りも、見せかけもなく、淡淡としかも円熟した筆致で書き進んで行く。「枯れた」というには未だ血の気が多いが、すみずみまで思いやりが行きわたり、さりとして感傷に陥ることがない。そして強く読者の共感を呼ぶのはもっぱら彼の才気によるものであろう。彼の才気は Aldous Huxley のエッセイにあらわれているほど高踏的なものではないが、嫌味がなくきわめて健やかな感じのものである。取扱っている材料が、必ずしもすべてよろこびの源となり得ない、時には怒り、嘆き、悲しみのたねを扱いながら、結局はよろこびに還元してしまうあたり、精神的向上も十分にうかがわれる。

しかるにエッセイストとしてそこまで行き着いたプリーストリーが極く最近 *Thoughts in the Wilderness* という異色のエッセイ集をひっさげて登場して来たのである。これは警世の書といってもよく、プリーストリー自身がそのことをはっきりと断っている。即ち、「自分は一流の人物ではなく、人間としては二級品かもしれないが、時たま大新聞に物を書くようなお方よりは、いささかましなものを二つばかり持っている」<sup>(1)</sup>と啖呵を切り、次のようにいい放つ。二つの中の一つは、“some sort of intuitive insight into what English people in general are thinking and feeling, a glimpse of the national mood of the moment. When it is working—and I think it worked in several of these pieces—it enables me to be a jump ahead of the politicians, leader-writers, and assorted pundits.”<sup>(2)</sup>となかなか鼻息が荒く、語気もはげしい。エッセイそのものについて見ても、今までの落ついた観照がかげをひそめ、あらわな噴瀧と叱咤が主調となる。しかしエッセイストは常に自分の心眼で周囲を眺めているのであるから、プリーストリーの場合を考えて見ると、彼のような健全な常識と道徳感からするならば、現時の世想がすべてあたかも澆季末世のように映るのはあるいはもっともなことと思われ、それを以て彼を旧弊であるなどと決めではならぬと思う。更に他の一つは“The other small advantage I have is that my mind, however it may be rated, is my own; nobody has hired it; no hidden plan of campaign guides it; and what it chiefly desires, even more than applause, is that English people should have a good life.”<sup>(3)</sup>

(1), (2), (3) J. B. Priestley, *Thoughts in the Wilderness* (1957), p. viii.



であって、彼はここで自分らの孤高の立場を何はばからずに表明している。少し誇張していうと、このことばを読むと、国を憂え、世を警める気概がひしひしと迫って来るように思う。“*Thoughts in the Wilderness*”という巻頭のエッセイは馬太伝第三章第三節の“The voice of one crying in the wilderness.”のallusionと思われるが、はたしてプリーストリーが洗礼者ヨハネの“Repent ye: for the kingdom of heaven is at hand.”のような啓示を意図したかどうかまでははかりかねるとしても、国民大衆の精神的虚脱状態をなげき、且憂える気持は純粹である。こういう時に creative overmastering idea<sup>(1)</sup>を待望するにはイギリスでも世間からファッションの烙印をおされることを覚悟しなければならないらしく、ロシア国民に共感し、彼等を褒めても、1945年以降のソヴィエットの国策に曖昧な態度でいると、途端に右翼にされてしまう態たらくだとあきれている。しかし彼は、自分は“... as much out with the Right (and can prove it, too) as I have always been. Only now I am also out with the Left. This leaves me in a political wilderness.”<sup>(2)</sup> だとはっきりいっている。ところがイギリスの政治界には、彼の他のことばを借りると、かたちとしては“two big political parties”があって“playing Box and Cox”であるのに、実はどちらも“state parties”で、そのくせ“one of them pretends not to be”だとさじを投げたかたちである。しかし国民のことは“It seems to me that people in general are aware, if only obscurely, of this central vacuum. Because people spend their evenings watching idiotic parlour games on TV or *Chun Chin Chow* on ice, this does not mean that the last glimmer of intuitive perception has been dowsed, though after a few more years of mass communications on this level the crowd may be permanently half-witted. But now, I think, they are still aware of something missing...”<sup>(3)</sup> と若干の希望をのこし、“... what matters is what is happening in people's minds, the quality of the experience there: and this is all that matters.”<sup>(4)</sup> と奮起を促し、“Can any sensible plan succeed if there is a cold dying centre?”<sup>(5)</sup> と叱咤、激励する。そして“contrive to live zestfully, laugh and love, still enjoying poetry and music and to talk.”<sup>(6)</sup> するよう教えさとするのである。Thoughts in the Wilderness という世情ではこれがプリーストリーからすれば精一杯の世人えのアドヴァイスだったのであろうか。

(1) J. B. Priestley, *Thoughts in the Wilderness* (1957), p. viii.

(2), (3), (4) *ibid.*, p. 5.

(5) *ibid.*, p. 7.

(6) *ibid.*, p. 6.

彼自身、ジャーナリズムで身すぎをし、特に世間では broadcaster として名声が高く、近頃はテレビの人気者であるのに、マス・コミの現状には大変に絶望的で *Mass Communications* と題する一文の中では、かなり思い切ったものいい方をしている。

To succeed in mass communications you must flatter the customer and never disturb him. And that, of course, is what is happening, on a gigantic scale in America, and on an increasing scale here and elsewhere.<sup>(1)</sup>

そして、五十年前には “even a popular newspaper was rather better than its average reader”<sup>(2)</sup> であつたのに今は “All day and half the night there are conferences in newspaper and magazine offices, film, radio and TV studios, deciding how everything can be shaped, coloured, cut down and trimmed, to flatter and tickle the mob of customers.”<sup>(3)</sup> かくなり果てたと悲しむ。すべて殷鑑遠からずといってもよさそうなことである。

このエッセイ集の最後に載っている *The Writer in a Changing Society* は 1955年に Herman Ould Memorial Lecture として口述されたものらしいが、思想の混乱と、マス・コミの墮落という二つの問題が併せ論議され、解決のいとぐちが結びとじてまとめて示されている。

And here we may have to use, out of sheer self-defence, those very mass communications that are helping to change our society, just because it is impossible now to appeal to a really wide audience in any other way. How much we should use them, how far we can help to civilize them, whether they could ruin us before we improved them—these and similar nice problems I must leave to your individual judgment. But if, as I believe, our world is already dangerously divided between intellect without feeling and feeling without intellect, then it is all the more urgently in need of all that we can give it coming both from the mind and from the heart.<sup>(4)</sup>

これは決して逃口上ではなく、警世の句であると思う。このことにはプリーストリーの contemporaries はひとしく強い同感を覚えるであろう。しかし同じ警世の句でも *Culture and Anarchy* (1869) とこの書が全く面目を異にしているのは、時間のへだたりとか、時代相のちがいのためではなくて、Matthew Arnold (1822—88) とプリーストリーの文筆家としての本質的差異のせいである。プリ

(1), (2), (3) J. B. Priestley, *Thoughts in the Wilderness* (1957), p. 10.

(4) *ibid.*, p. 241.

ーストーリーはもともとエッセイスト以外の何ものでもないのであるが、ただ最近になって彼の動向が著しく変って来ているだけに、今後の彼のエッセイ活動はまことに注目に価するものと思う。

(8. 28. 1958)

(おことわり) かなり長い引用を各所に原文のまま掲げたのは、部分的にでもエッセイを生のまま読んで頂けたらと考えたからで、直接「ストーリー」を扱うところあたりからそれがふえている。